

# ふぞく新聞

4月24日(金)

Vol. 1  
(Vol.111)

## おおきくなったなあ

ふぞく幼稚園の二十一年度がスタートしました。

憧れの紫バッチを胸につけて、とても楽しそうに遊んでいる年長さんの子ども達を見ていて、ふと年少組の入園の頃を思い出しました。

「この子達は、よく泣いていました。困ったことがあるとすぐに泣いていました。」

「この子達は、いつもおんぶにだっこをして先生にべったり甘えていました。」

「この子達は、声を掛けても固まったり、遊びに誘っても中々入ってきませんでした。」

「この子達は、並ぶよー!」と声を掛けても、バラバラになって歩いていました。」

今では、想像がつかないような姿ばかりです。大きくなったのです、なっているのです。

入園式の際に、保護者の皆様にお伝えした

ことがあります。昨年度の入園式でも同じ

ことを言いました。つまり、それだけ大切な

ことだと僕は思っているのです。

どうぞ、この節目である入園式の姿を目

に、心に焼き付けておいて頂きたい。他人

との比較ではなく、我が子のありのままの

姿を!」とお話させて頂きました。

ありのままを受け入れてもらえることが

どれほど心地良いことか、まずは、そこから

始めていきたいと思っています。

そこを土台に、集団生活を通じて、少しずつ

つ色々なことを感じて、知って、覚えていけ

ばよいと思っています。

上段の話は、まさにその成果(結果)です。

子ども達は、大人が思っている以上に、育つ

力を持っているのです。大人の役目は、育て

るのではなく、育つ力を支えるのです。

### 独り言

今年度も『ふぞく新聞』を書かせて頂きます。

『ふぞく新聞』って何?と思われる方、それは、年数は重ねたものの、子ども達の助けを常に借りながら日々保育をしている幼稚園園長が、子ども達と遊び、過ごさせてもらった中で感じたことを思うがままに書いたものです。

当園の方針は『子ども達の遊びを応援する幼稚園』です。その応援方法の一つとして、この『ふぞく新聞』を通して子ども達の気持ち・言い分・心等々を父母の方に伝えていきたいと思っています。勿論これらが全て正しいわけではありません。でも少しほんの少しでいいので頭の片隅にという願いもあります。 柿原勝

# ふぞく新聞

5月22日(金)

Vol. 2  
(Vol.112)

# 大人をまねる！！

ゴールデン・ウィークも終わりました。子ども達は、まさに十人十色で、幼稚園で様々な姿を見せています。

もうすっかり一日の流れを覚えて遊んでいる子、担任の先生が自分の視界から消えると不安になり、**メガネのおとこのせんせい**は？」と僕に助けを求める子、ブランコを押して欲しいのだけど、誰でも良いというわけではなく、その先生が来てくれるまで**〇〇せんせい**！」と大きな声で呼んでいる子、毎日同じ遊具で遊んでいる子、遠くから先生とお友達が遊んでいるのをじっと見ている子(誘っても**いい**と言って断るのです)が、よく観察しています。その内きつと入っていくことでしょ(う)等々。そんな様々な姿を見せる子ども達と一緒に遊んでいて気付いたことが…

ふぞく幼稚園には、土手があります。昨年度の夏に工事をして、冬にそり滑りが出来るようにちょうど良い傾斜にしてもらいました。

その土手を登ったり、降りたりして遊んでいた時のことです。ある園児が、**転がったら面白いよね**。」と云うので、**そうだね。転がっているよ**」と僕は答えましたが、その園児は**ひない**」と云ってそのまま立っていました。その内、他の子が**園長先生を落とせ**」と云って僕を押して来たので、**助けてくれー、あーれー**」と云って本当に転がって落ちていきました。

すると、さっきまで**ひない**」と云っていた子も、他の子もたくさん転がり始めたのです。確かに服は泥や草がついて汚れましたが、子ども達はとても嬉しそうです。

子ども達には、言葉よりも行動なのです。

## 独り言

大人は、ついつい言葉だけで指示します。

「やってみなさい」とか「やらなさい」と出来ないのよ」等々。

でも、子ども達は、本当に楽しいのか、怖くないのか、大丈夫なのか、怒られないのか等々頭で考えているのです。

そんな時に、身近な大人達が実際に行動で、態度で示して見せることは、とても意味があるのです。

大人が、率先して行っていたら、子ども達は、自然とその姿を真似するのです。

行動力ある子になって欲しいと願っているのならば、まずはお手本を大人が見せることが一番だと、今回の出来事を通して改めて感じました。  
柿原 勝

# ふぞく新聞

6月19日(金)

Vol. 3

(Vol.113)

## 順番を守れるまで

子ども達と遊んでいると、**順番だよ**と年長さんが年中少さんに言っているのをよく耳にします。でもその場合、言われた年中少さんが快く納得することはほとんどありません。

サッカーの時のことです。年中さんのある男の子が、**僕もキーパーしたい**と言ってゴールの所に行きました。でも、そこには、年長さんの別な男の子が**俺がキーパーだから、あっち行け**と言って怒っています。

その男の子は、ちゃんとジャンケンで勝ってキーパーになった子なので、言い分は正しいのです。(まあ、言い方は確かにキツイですが、間違っていないのです)

すると、別な年長さんが、**順番だよ**と言って教えてくれましたが、年中さんの子は「？」。

さて、「」の上段の話の続きをまずお話しします。子ども達だけでは、どうも上手く説明出来なかつたようで、年中さんの子が不満気味な表情でいます。そして、年長さんの子も達も、その子に今までの経過を説明出来るほどではなく、**あっち行け**とか**どけ**と喧嘩になりそうだったので、僕が入りました。

年中さんの子には、**〇〇もキーパーしたい**だよね」と、気持ちを確かめました。そして、キーパーは出来るけど、すぐには出来ないんだ」ジャンケンで勝った人から順番で、**〇〇がキーパーしたい**なら、**△△君の次で、4番目だよ**と教えました。又、怒っている子には、ジャンケンで勝ったんだもんね。だから、変わりたくないよね」と共感した後で、**まだ年中さんは、サッカーのルールが分からない**だから、怒るんじゃないよ、教えてあげてよ」と伝えました。さて、子ども達はどんな気持ち(状況)だったのかを補足していきます。

まず、**僕もキーパーしたい**と言ってゴールの所に行った年中さんは、サッカーを良く知っているわけではなく、又凄くしたかったわけでもないのです。手が使えないキーパーがなんか思い通りになりそう(足だと上手くない)かかっている(気がした程度)だったようです。その証拠に、キーパーがすぐには出来ないことを僕から説明されて(知ると、別な遊びを始めたからです)。

次に、怒った年長さんの子は、自分がジャンケンで勝って正当な理由でキーパーになれたから、自分の気持ちを主張しただけで、別に悪気はないのです。最後に、**順番だよ**と教えてくれた子は、自分の中では理解出来ていても、分からない年中さんに教えてあげられる程ではなかったのです。

僕は、大人がすぐに**順番だよ**と言っているのを聞いた時、その言葉だけで理解出来ている子はどの位いるのかなあと思う時が多々あるのです。

### 独り言

子ども達と雨上がりの朝の自由遊びの時に『かたつむり』を捕りに出掛けました。幼稚園の周りは落の葉が沢山あるので、よく探せば結構見つかります。

でも、子どもの力だけで見つけるのは少々難しいので、先生が見つけたのを子ども達に教えて自分で捕らせました。

その時に、子ども達は「僕の」「私」の」と我先に言います。そこで、順番を実践するので、子ども達が分かるように、「〇〇の次は△△ちゃんね。その次は□□君」といった感じます。そして、全員分見つけてあげて、一番じゃなくてもちゃんともらえることを証明し、順番を守る良さを実感させるのです。柿原 勝

# ふぞく新聞

7月17日(金)

Vol. 4

(Vol.114)

## 『遊び』が『学び』の証明

以前、『ふぞく新聞』で『遊び』と『学び』の関係について書かせて頂きました。小学校の教科教育『学び』の根っこは、幼児教育の『遊び』に繋がっている』ということを書いたのですが、その実例を今回は述べたいと思います。

子ども達と戦いごっこをして遊んでいた時のことです。まず『戦いごっこする人よついでえ、後から来ても入れますよ』と声を掛けると十名前後集まってきました。

『じゃあ、きりんさんの誰かに全部で何人いるか、数えてもらおう！』と僕が提案します。すると何人かが手をあげるのので、ジャンケンして決めます。この時のジャンケンも、勝ちか負けかをしっかりと解説しながら見守ります。なぜなら年少さんも見ているからです。

ジャンケンはとても簡単で、明確ですが、年少さんや年中さんの一部はまだよく理解しきれていないのです。だから解説には意味があるのです。ジャンケンには立派な遊びです。子ども達はあいつがずっと続くと、とても嬉しそうにまた「緒だあ」と笑います。このような場面を大切にしているのです。物事の仕組みを知りに繋がるのです。

さて、ジャンケンで人数を数えるお友達が決まると、みんなに協力をしてもらいます。数えやすいようにする為にどうしたらいい？』と聞くと、きれいに並ぶとか、円になる』と意見が出ます。

『二』のような質問もとても大切です。自分達で考えるくせを平日頃からつけるのです。そこで、きれいな円になってもらいます。そこで、お友達に『先生からゆっくり数えて』と頼むと、『二、三、四』と数えていきます。人数が合っている時は、凄いい、良く数えられるね』と誉めます。間違えている時は、もう一回数えてみて』と言って何度かさせます。

さて、この後が大切です。八人だとしたら、指を四本と四本で示して『じゃあ、二つのチームに分けるには何人と何人？』と質問するのです。

指を見ていない子は、『八人と八人』とか『五人と五人』と適当に答えます。

そんな中僕の指を見ている子が、『四人と四人』と答えたら、『凄いい、小学生みたい！』なんて分かるの？』と誉めます。

そこでまだ終わったらダメなのです。本当に、四人と四人なのかを数えて確認するのです。まさに、算数です。その内、指を示さなくても、『四人と四人』と答えるようになるのです。

そこに新たに『僕も入れて！』と入ってくれば、みんなに聞いてまた考えます。まさに算数です。ドリルが必要でしょうか？いやいりません。

### 独り言

上段の話ですが、恥ずかしながら僕は以前全く出ていませんでした。子ども達は、色々と言っているのに聞かずに、無視して（聞くことが出来ず）自分の意見を全面に出して「急いでジャンケンして、はやく戦いごっこしよう」と言っていました。

ジャンケンが遊びであり、学びに繋がることなど全く考えず、「戦いごっこ」という遊びのみが大切なんだと思いついていました。

遊びと学びの関係性を深く知れば知るほど、保育者が何気ない会話や何気ない行動に意味を持たせていくことが大切なのだと思ふようになりました。「保育は本当に天井なし」です。

柿原 勝

9月1日(火)

Vol. 5

(Vol.115)

## 卒園児のお泊まり会後

ふぞく幼稚園では、平成二〇年から、卒園児のお泊まり会というのを企画しました。

卒園後も見守る幼稚園』でありたいと思い、その具体的な案として、小学生を対象にしたお泊まり会を夏休み中に行うことにしたのです。

二回目ということもあり、今年は昨年以上の参加者がいました。我々にとって、たくさんの卒園児が来てくれることほど嬉しいことはありません。釧路から引越しをしたお友達も参加してくれたことには、更に感謝です。

そのお泊まり会後、色々なことを思いました。僕から見たら、卒園児は確実に成長してしました。その証拠に、言葉だけの指示で理解して、夕食の準備や布団の準備をしていました。これには、正直感動しました。

さて、上段の最後のところなのですが、「れ、決して当たり前ではないのです」言葉だけの指示で、物事が通じるのは、本当に凄いことなのです。

言葉だけでは、なかなか分からないもので、実物を見せたり、見本を見せたり、実際に行って見せるとわかるものなのです。

僕が、感動したのは、体育館でみんながゲームをした時のことでした。

僕は、あえて幼稚園児に教えるように説明しました。その時、**簡単だよ!**「分かるよ」と言っていた子がいました。その子は、幼稚園の時は言葉だけで説明すると?」という子だったのです。

成長している事実を、**習たり前**と一言で片付けてはいけません。子ども達を伸ばす』というのは、「このような当たり前をしっかり認めていく」ことから始まるのです。

### 独り言

新型インフルエンザがここに来て再び騒がれ始めました。

とても残念なことですが、死者が世界で二〇〇〇人を超えたそうです。

このような病気や自然災害があると、改めて平和であることがどれほど素晴らしいことなのかを実感します。しかし、本当は、それではいけないのです。平和である時に、そのことへの感謝を忘れず、その平和が決して当たり前ではないことを認識しなければいけないのです。

上段で書いた、子ども達への気持ちと同じです。当たり前などないのです。何事も積み重ねてきたからなのです。その気持ちを忘れずにいたいです。柿原 勝

# ふぞく新聞

9月25日(金)

Vol. 6  
(Vol.116)

## 子ども達からの賛辞

子ども達は、とても良い感覚を持っています。面白い物や本質を見抜くセンサーのようなものを持っています。

そんなセンサーを持った子ども達が、本当に楽しかった時に「おもしろかったなあ」とか「また行きたいなあ」とか「先生、明日もまたやろうね」とか、「おいしかったね」という言葉を発します。

その言葉を聞くと、「よし！」と心の中でガッツポーズをとります。

先生、ありがとう」「先生、楽しかったよ」とお礼に来る子もいますが、僕は、そのお礼の言葉よりも、遊びが終わった後、友達同士で何気なく「大人目の目を意識することなく」おもしろかったなあ」と言っている方が嬉しいです。「この言葉こそが最高の賛辞だと思っています。」

さて、上段の子ども達の最高の賛辞を僕は園長になってからよく耳にするようになりました。

きりん組の『流しそうめん』の時、ある数名の園児が勝手にお部屋に戻ってきたのです。(これ自体は良いことではないですが)そして、玄関で話しているのです。楽しかったなあ「うん、おいしかった！」と、僕は職員室で仕事をしていたのでこの最高の賛辞を聞くことが出来たのです。

園外保育で、園バスで公園から帰ってきた時、玄関で「ただいま！」と言っている子の横で、「楽しかった！」という最高の賛辞の声を聞くことも出来ました。

公園から帰ってきて、手洗いをしながら「また行きたいね」「うん、面白かったね」と二人で嬉しそうに話しているのを聞くことも出来ました。

### 独り言

このような最高の賛辞を子ども達が言っているのを僕は知っているからこそ、先生方に「お疲れ様」と声を掛けるのです。子ども達がこの賛辞を言う時は、ただ楽しいだけじゃないのです。先生方が安全も確保したからなのです。

先生方が、子ども達が楽しめるように、大変な準備をしっかり行ったからなのです。楽しいことの陰には、必ずそれを支える先生方の苦労があるものです。尊敬する二宮先生は、「子ども達の笑顔を想像すると、その苦勞が喜びになる」と言っています。実践するのは難しいことです。だから、僕は誉めるのです。先生達

も！ 柿原 勝

# ふぞく新聞

10月23日(金)

Vol. 7  
(Vol.117)

## 『野球』遊びを通じて

ふぞく幼稚園の子ども達は、外遊びが大好きな子が多いです。例年は、『ブランコ』『回転遊具』戦い『ごっこ』『尹ツカー』が人気の遊びなのです。が、今年はそこに『野球』も加わって年長さんが毎日のように**先生、今日も野球しよう!**と誘ってくるほどです。

ただ、野球といっても、あくまでもボールを打ったり、投げたりするという延長で行うつもりだったので、今年はかなり本格的になってきました。大人が「こうした方がいい。本当のルールは・・・」と教えたのではなく、子ども達が**先生キャッチャーする」「ファールをなしにしよう」**等子ども達の声をもとに自然とそうだったので。子ども達は、本当に大人達(テレビのプロ野球選手も含め)をよく観ているのを感じます。

『モデリング』という言葉がぴったりです。

『モデリング』とは心理学用語で、何かしらの対象物を見本(モデル)に、そのものの動作や行動を見て同じような動作や行動をする事です。人間(主に子ども)の成長過程では、モデリングにより学習・成長すると言われています。

テレビの中のプロ野球選手は、子ども達にもとても格好良く映っているのでしょう。楽天のマー君の投げ方と同じように投げる子がいきました。その子は、多分素直に模倣しているだけなのでしょうが、年長さんとは思えない程早いボールを投げます。

打つ方も、お兄ちゃんが野球部なこともあり、その時のスウィングを真似てバットを振るからとても上手です。余計なことを言わないことが僕の仕事なのです。

「これらは保育の世界にも当てはまります。良い見本を常日頃から見ることで、良い見本の保育者と常日頃から接することで、子ども達は、自然と真似をしていくのです。

累計な助言よりも良い行動です」

### 独り言

さて、野球遊びを通じて更に感じたことは、順番を守るという意味が分かってくるということですね。

サッカーとは違い、打順があります。待っていることがあまり好きじゃない子は、「**先生やめる**」といって、一度打つと違う遊びに行ってしまうこともよくあります。(それが子どもらしいのです) 待っている間も応援や、先生や友達の様子を観察して楽しめる子は、毎日のように野球をしようと言ってくる子です。

ただ、野球は改めてルールが複雑なのを感じます。年中少さんのほとんどは「？」です。だからこそ先生の出番です。みんなも楽しめるようにルールを変えるのです。柿原 勝

# ふぞく新聞

11月30日(月)

Vol. 8  
(Vol.118)

## 欠点に見える(=長所は見えにくい)、 あら探しは簡単(=長所は探せない)

つい最近、『子育て』について、『子ども』についてある方とお話をさせて頂いた時のことです。

保護者の方に、幼稚園や保育園で見せたお子さんの良いところをお知らせすると、逆にやきもちを妬く(=ショックを受ける)保護者が増えてきた」というものでした。

具体的に例を挙げると、○○ちゃん、今日お片付けを率先していたんですよ」とお知らせすると、家では、全然お片付けなんかしません。私の接し方が悪いのでしょうか・・・」と返答されると、

「この時にその方と意見が一致したのは、どうも最近の保護者の方は、完璧を求める傾向にある」というものでした。

子育てに完璧なんて決してないのです。

上段の話で「これはややこしいぞ」と思うのは、幼稚園や保育園の先生方は、保護者の方に「子ども達の良いところ」を伝えたくて、お母さんに一緒に喜んでもらいたくて伝えたのです。それが逆効果となると、先生方は保護者の方に「子ども達の良いところ」を伝えるのを躊躇してしまいます。

「お母さん方！」と注意することには全く意味がありません。なぜならば、今の日本社会の子育てとはそれほどまでにお母さん方へ目に見えないプレッシャーがかかっているからなのです。

子ども達が少しおかしな(=みんなと違った)行動をすれば「お母さんがちゃんとしていないから・・・」とすぐに問題点をお母さん方に向けてきた結果でもあるのです。

僕も含め、自分のことはさておき、他人のあら探しが好き、これが大問題です。」

### 独り言

子ども達の長所をすぐに「5つ」言えますか？

この質問をされたら、僕も含め、多くの先生方も、「1つ2つはすぐに出て、後…」となかなか出てこない姿が容易に想像できます。

逆に、「○○君に直して欲しいところ、△△ちゃんに変えて欲しいところは？」という質問をしたら比較的すぐに5つぐらい、下手したら5つ以上挙げたりそうです。

お母さん同士がそれぞれのお子さんについて話し合っている内容を近くで聞いてみると、お互いに良いところを見つけ出せていることに気が付きます。でも『自分の子』となると話が違つようです。これが難しさです。 柿原 勝

# ふぞく新聞

12月2日(水)

Vol. 9  
(Vol.119)

## 長所とは？

### (見る)角度を変える(=意識改革)

前回の『ふぞく新聞』の続きです。短所や欠点にはすぐ気付くのに、長所や利点にはなかなか気付かないものなのです。

では、改めて長所や利点について考えたいと思います。

『ごはんをよく食べる(食が良い)』のはとても素晴らしいことですが、どうもあまり評価されません。それどころか逆に嫌がられ、何故か短所になっていることさえあります。食が細くて、体が弱い子』をもつ保護者からしたら、羨ましい限りの長所です。

『よく寝る子』もとても素晴らしいことですが、同じくこれも評価されません。眠りが浅く、夜すぐに目を覚ましてしまう子』をもつ保護者からしたら、同じく羨ましいことなのです。

上段のような具体例を挙げると、どうい

えばそうねえ・・・と少し考え方を変えて

頂けるのですが、まだもう一步納得してく

れません。どうも、最近の保護者の方のいう

長所は、万人(かなり多くの方)から認めら

れるもの(勉強・運動・人間関係・音楽等)

が対象のような感じがします。

それが特に顕著なのが幼児期で、オールマ

イテイな子を保護者が求めている感じを僕

は受けます。

幼稚園・保育園の仕事を長くさせてもらっ

たおかげで、色々な違いを持った子ども達

に出会いました。そして、その子達と一緒に

生活をしているとみんな本当に違う」とい

う当たり前のことに気付かされます。

みんなに優しい「おく気がつく」「観察力

あり」「発想が豊か」「物知り」「努力家」等々

素晴らしい面がみんなに必ずあるのです。

## 独り言

平成十九年度から本格スタートした特別支援教育も、三年目を迎えました。

十月に、愛知から杉山登志郎先生が、十一月に大阪から竹田契一先生が、釧路に来て講演会をされました。

その二人の先生の講演会の内容がまさに特別支援教育についてでした。

色々な子ども達と関わってきた二人だからこそ、行きつくところが同じだったのだと僕は感じています。

変えるべきは、日本の教育スタイルなのです。

特別支援教育のねらいは、教師の意識改革だそうです。子ども達の長所を見つけ出せる先生方の視点が全ての始まりになるのです。柿原 勝

# ふぞく新聞

2月10日(水)

Vol. 10  
(Vol.120)

## 遊んでいるからこそ！！

ふぞく幼稚園は、今年から秋になったらジャン  
グルジムの場所を移動して、園庭でもそり滑り  
が出来るようにしました。(学園グラウンドのそ  
り滑り場もありますが、年中少さんのことを考  
えると少々遠いのです)

今年は雪がたくさん降ったので、多くの園児が  
お尻滑りやそり滑りを楽しんでいます。

そのそり滑りをして楽しんでいるとある園児が  
**「だるまさんころんだ」**をしようと提案してきま  
した。しかも、その坂を利用して行おうというの  
です。

これは面白いと思い、子ども達の意見をもとに  
ルールを決めて遊びました。

その結果 **「だるまさんがのぼった」**という遊びが  
誕生したのです。さて、「この遊び……」

上段の **「だるまさんがのぼった」**のルール  
は、鬼役は坂の上で **「だるまさんが……」**と大  
きな声で言います。

坂の下から子ども達は少しずつ鬼の背中  
を目指して近づいていきます。

しかし雪の坂ですから登るのも難しいし、  
動かずに止まっているのも難しいのです。

ただ、子ども達の靴はスパイク付きなのか  
僕は滑っているのに上手に登っていきます。

そして、鬼役は一度だけ **「だるまさんがす  
べった！」**と言います。 **「すべった！」**と言っ  
た時は全員滑って落ちなくてはいけないとい

うルールが後半生まれ、これが面白いよう  
で、滑っていく時も楽しそうです。

そして鬼役の背中を誰かが触って滑って逃  
げていった後、 **「ストップ！」**という下で待ち

ます。鬼役は、 **「大股二歩」**ではなく、そりに  
乗って降りていくのです。面白そうですよ。

### 独り言

遊びを通じて子  
ども達は色々なこ  
とを学んでいるこ  
とを改めて感しま  
す。

遊びを通じて、  
知恵がついている  
からこそ、上段で  
書いたような遊び  
が子ども達から生  
まれるのです。

知識は確かに必  
要です。でも、そ  
れ以上にこの時期  
は知恵を大切にし  
ていきたく考えて  
います。

知恵をつける為  
には、何をしたら  
よいかと言うと、  
やはり『遊ぶ』こと  
だと僕は思ってい  
ます。

楽しみながら、  
色々なことを実感  
するのです。  
物事の仕組みや  
自然を頭で分かる  
のではなく、体と  
心で感じるので

す。それが、今後  
大きな広がりを見  
せるのだと信じて  
います。 柿原 勝

# ふぞく新聞

3月11日(木)

Vol. 11

(Vol.121)

## 巣立っていくみんなへ

いよいよ年長組の園児の卒園が近づいてきました。そうです、巣立ちの時です。

僕は、いつも卒園はゴールでは無いという言い方をしています。でも、大切な区切りや節目だと思っっています。そんな大切な節目を迎える年長組のお友達にメッセージをおくりします。

入園の時に泣いていたお友達、先生はその姿も覚えています。泣いているお友達に対して『え？なんで泣いているの？おかしいなあ・・・』なんて思っていないなかったよ」それだけ、お母さんやお父さんとの時間が楽しくて、心地良かったのだと思っていました。

そのお友達が、**幼稚園も楽しい**」と言って登園してくるようになった姿を見て、本当に嬉しく思っていました。

お友達とケンカしたこともあったね。叩きあったり、引つ張りあったりして泣いた時もあったね。

ケンカをするということは、それだけ自分の気持ちをちゃんと出せた証拠だから、とても良いことだと思っていました。

自分の気持ちを相手にきちんと伝えることは、とても大切なこと。それで、ケンカになったのならば、それは良いことだね。ケンカするから悪い子だなんて思っってなかったよ。

**嫌なことは、嫌だ!**」と言えることは、とても大事なことから、これからも忘れずにいて欲しいと思っています。

色々な遊びをして、たくさん笑ったね。みんなで楽しいことをして、笑えるのは、とても幸せなこと、そんな一緒に笑うことが出来る友達が出来たことはとても素晴らしいことだね。たくさん友達をつくって下さい。

### 独り言

今年も、たくさん子ども達から元気をもらいました。

今年も、たくさん楽しませてもらいました。

この仕事をしていると、たくさん子ども達から大切なことを教わりま

す。子ども達は、ますますに気持ちをぶつけてきます。

そんな子ども達の気持ちに正直に答えたいと思っ

てこまできましたが、今年はずっとたくさん裏切ったと反省しています。

「また、お仕事?」と子ども達に言われる度に「ごめん」と思いながら、「遊べる時は全力で」

を掲げて過ごした一年でした。

まだまだ、反省の毎日ですが、最後の言葉はやはり

「ありがとう」です。柿原 勝